願成寺内相良家墓地（県指定史跡・人吉市）

山々に囲まれ、文化のゆりかごは歌いつづける

球磨・人吉は不思議なところだ。全国に広がったのに、今ではここにしかないものがある。例えば、ウンスンカルタ…。異国の地から伝わり、ここでユニークな発達を遂げたものがある。たとえば、球磨拳…。

個性的な球磨のあれこれをつくってきたものは何だろう。

相良七百年。球磨・人吉の藩主、相良氏がこの地に初めてやって来たのは一一九三年。源頼朝が鎌倉に幕府を開いた翌年だった。かげりのない海辺の国、遠江（今の静岡県）から、山と霧に包まれた人吉盆地へ。初代相良頼景は予想しただろうか。ここに末代まで住むことになると。相良氏は、中世の初めから明治維新まで、ずっとこの地を治め続けた、日本でもまれなお殿様だ。

今、熊本市から人吉まで高速道路を走るとわずか一時間。しかし中世の球磨・人吉では、険しい山々が旅する人の行く手を阻んでいた。天然の砦が、「下剋上」の戦国時代にも当主を守り通したのだ。

寺院は戦火に遭うことなく残り、そこに安置された仏像も、中世から平成の世までを見続ける。ウンスンカルタも、球磨拳も、みな、相良氏のもとで生きてきた。球磨・人吉の盆地は、たくさんの文化を守り、育んできたゆりかご。それは遊びであり、芸術であり、信仰であり、生のすみずみにまでしみる暮らしそのものだ。

だからこそ、かつてアメリカの文化人類学者エンブリー博士は、日本の農村研究のサンプルとして、球磨郡の須恵村を選んだ。SUE・MURAには、日本の生活文化がつまっている。

豊かな文化のゆりかご―球磨・人吉はつくづく魅力的なところだ。